

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 14 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 ～ 2011

課題番号：20500896

研究課題名（和文） 大都市近郊農村におけるグリーントリフィケーションの
創成とその持続性に関する研究研究課題名（英文） Development of greentrification and its sustainability in the
metropolitan fringes

研究代表者

菊地 俊夫（KIKUCHI TOSHIO）

首都大学東京・都市環境科学研究科・教授

研究者番号：50169827

研究成果の概要（和文）：

本研究は大都市近郊農村を主な対象にして、農地や谷戸、および里山や林地などの緑地空間の再編をグリーントリフィケーション（greentrification）として捉え、その創成メカニズムと持続性を明らかにすることを目的とした。グリーントリフィケーションとは「緑地空間の再編・美化」や「緑地空間価値の高度化」ともいわれるもので、その研究は農村や農山村における非経済的な価値を見直すことにもなる。大都市近郊では、農村空間の構成要素である里山と農地を農村と都市のコミュニティが協働で保全してグリーントリフィケーションを成立発展させ、そのことが大都市近郊農村の持続性を高めていた。

研究成果の概要（英文）：

In this study the author focuses on greentrification as an option of regional restructuring in the metropolitan fringe, and discusses its creation mechanism and sustainability in rural space. Meanings of greentrification are often associated with the beautifying of open and rural spaces including rural land use/covers and landscape, as areas where rural communities exist and rural activities occur. In the metropolitan fringe, rural land use/covers and landscape have been maintained and recreated with the restructuring of some basic elements of the rural space. In the creation of greentrification, there are elements of agricultural and forestal activities, their production, rural land use/covers and landscape, and farms and their community. The interrelation among these elements plays an important role in restructuring rural spaces as well as the creation of greentrification.

In the Jike area of Yokohama city as a case study of the greentrification types, the decrease in area of rural forests (*satoyama*) has led to the decline of rural landscape; the development of affordable housing lots in the outer fringe and the continuous inflow of urban residents into the newly developed areas have led to serious conflicts between rural and urban land uses. Recently however, activities that aim at recreating greentrification, such as conservation of rural forests, have been promoted as a means to mitigate such conflicts, and to develop these areas as nodes of rurality and urbanity. Thus, the perpetuation of greentrification has been assured by the sustainable relationships between rurality and urbanity. The creation of greentrification facilitates the sustainable development and restructuring of rural spaces.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2008年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2009年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2010年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2011年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 総計 | 3,500,000 | 1,050,000 | 4,550,000 |

研究分野：複合領域

科研費の分科・細目：地理学・地理学

キーワード：グリーントリフィケーション、大都市圏近郊、緑地環境、農村再編、持続性、ルーラリティ

1. 研究開始当初の背景

従来、農村の地域的な性格は経済活動を優先する生産主義のフレームワークで議論されてきたが、1990年代以降、環境や生き甲斐などの非経済的な要素を踏まえて農村の性格を議論しようとするポスト生産主義のフレームワークが台頭してきた。ポスト生産主義の農村研究の動向のなかで、農村景観を再編し美化することで、居住環境を高めていく「ルーラルジェントリフィケーション (rural gentrification)」の研究が新たにヨーロッパで注目されるようになり、農村再編に関する研究を大きく進展させた。

ルーラルジェントリフィケーションの議論は農村の居住環境や社会・経済環境の再編を中心とするものであったが、農村の生態環境（農地、牧草地、林地などを含めて）の再編に関する議論の必要性が提案された。その結果、農村の生態環境としての緑地空間の再編を議論するグリーントリフィケーションのフレームワークが示された。ヨーロッパにおけるグリーントリフィケーションの議論は、条件不利地域における不耕作地や荒廃林地の美化や有効利用を通じて、あるいは大都市近郊農村における緑地環境の保全と適正利用を通じて行われ、緑地や農地を含む農村の生態環境が経済環境と社会環境に相互関連していることを明らかにした。このように、農村の生態環境を中心にと経済環境と社会環境を関連づけることにより、農村再編の議論はより実際の具体的なものとなった。しかし、農村の生態環境と経済環境、および社会環境をどのように関連づけるかの議論は現在まで残された課題となっており、その課題を明らかにすることが本研究を始める契機となった。

2. 研究の目的

本研究は大都市近郊農村を対象にして、農地や谷戸、および里山や林地などの緑地空間の再編をグリーントリフィケーションとして捉え、その創成メカニズムと持続性を明らかにすることを目的としている。グリーントリフィケーションとは「緑地空間の再編・美化」や「緑地空間価値の高度化」ともいわれるもので、その概念の世界的な浸透は農村や農山村における緑地空間の経済的な価値だけでなく、非経済的な価値を見直す機運と呼応している。

3. 研究の方法

大都市圏における農業的土地利用と都市的土地利用の時間的・空間的变化からグリーントリフィケーションの実態を把握し、その創成メカニズムと持続性を明らかにする。また、大都市圏における土地利用分析から、グリーントリフィケーションの類型化が試みられた。その結果、グリーントリフィケーションの類型として大都市近郊型と大都市近郊外縁型、および大都市遠郊が抽出された。

大都市圏におけるグリーントリフィケーションの類型化に基づいて、それぞれの類型の事例地域において実証的な研究を行った。実証研究では、グリーントリフィケーションの創成メカニズムの様相を明らかにするとともに、それが農村地域にどのような効果や影響をもたらすのかも担い手や持続性に注目しながら明らかにした。具体的には、農村地域における土地利用の時間的、空間的变化を明らかにし、その変化の分析からグリーントリフィケーションの創始パターンを求めた。

グリーントリフィケーションの創成要因を自然環境と社会・経済環境、および歴史・文化環境や政策から総合的に分析し、その創成メカニズムを精緻化した。また、グリーントリフィケーションと諸環境や地域資源との相互関連性から農村資源の保全や適正利用、および社会的持続性を検討した。加えて、大都市圏におけるグリーントリフィケーションの創成メカニズムや社会的持続性に関する地域比較（大都市近郊と大都市近郊外縁、および大都市遠郊外）と国際比較を行った。その際、グリーントリフィケーションの創成と持続性のメカニズムを人間－社会－自然－文化－経済の関わりで体系的に比較し、グリーントリフィケーションの創成と持続性のメカニズムを一般化する。

4. 研究成果

高度経済成長以降、大都市近郊農村とその周辺では住宅開発の拡大や農業就業者の減少により、近郊農業の持続は難しくなってきた。また、谷地の水田とともに農村景観を形成してきた丘陵地や里山の林地も化学肥料の普及やエネルギー革命により利用されなくなり、荒廃化した。このような状況を改善するため、地域の特徴を活かした地域づくりの方法が模索され、グリーントリフィケーションが3つの柱に基づいて実施されてきた。すなわち、第1の柱は、美しい田園景観を保全しながら、土地、人を含めた農村資源を活用することである。第2の柱は、観光農業の推進などで農業の第三次産業化を促し、農家の生活安定と地域での就業機会の増大に努め、地域の活性化を図ることである。そして第3の柱は、新住民や学童などが自然、農業、農村の雰囲気を体験することにより、健康で心豊かな人づくりに役立てるとともに、農村と都市の相互理解を深めることである。

以上に述べた3つの柱を基本的な理念として、事例地域として取り上げた横浜市青葉区寺家地区ではグリーントリフィケーションの創成がはじまった。それは1981年からはじめられた農林水産省の自然活用型農村地域構造改善事業（神奈川県緑の里整備事業）により支えられ、1984年に設立された寺家ふるさと村体験農業振興組合を担い手に進められた。農林省の自然活用型農村地域構造改善事業や神奈川県緑の里整備事業により、横浜市が寺家地区周辺の里山や丘陵地の林地を地権者から長期的に借受け、その林地を寺家ふるさと村体験農業振興組合が維持管理するようになった。結果として、谷地田周辺の林地が保全されるよう

になり、そこから涵養される水に依存している谷地田も保全されている。林地や谷地田の生態的基盤の保全にともなって、水稻作などの農業が経済的基盤として維持され、農家も農村を性格づける社会的基盤として残ってきた。このようなグリーントリフィケーションの創成により、農村空間が都市近郊の余暇空間としても機能するようになり、農村散策をする人々の増加にともなって、グリーントリフィケーションの創成は決定づけられた（写真1）。



写真1 横浜市青葉区寺家地区における谷地田の保全とグリーントリフィケーションの創成
(2010年7月撮影)

寺家地区におけるグリーントリフィケーションの創成は、農村のさまざまな機能の保全や再編に寄与してきた。例えば、谷地田を涵養する谷頭からの小川は側面と底をすべてコンクリートで整備せず、なるべく土の面を残して整備された。この整備により、川沿いに水生植物が繁茂するようになり、水生植物を基盤にして水生生物も生息し、水生生物を餌とする魚類や鳥類もみられるようになった。農村における生物多様性の機能が再生・保全され、ホタルが生息する小川は季節になると農村散策をする多くの人々を集めた。そして、ホタルの飛び交う農村景観はグリーントリフィケーションの創成を象徴するものとなった。

また、都市空間に隣接したグリーントリフィケーションされた農村空間の存在は余暇空間や癒しの空間、あるいは小さな子供の遊びの空間として重要であるが、都市と農村との交流の空間としても重要なものとなった。都市と農村の交流において重要な役割を果たすのが農産物直売所であり、直売所で新鮮で安全安心な野菜を買うことは、農家と農村の生活の知恵や情報を得ることになり、それは都市と農村の交流を基盤にしたグリーント

リフィケーションとなった。

したがって、農村散策をする人々が多くなれば、農産物直売所の収益も増加し、グリーントリフィケーションの経済的基盤を確かなものに行うことができる。農産物直売所の存在意義が確かなものになれば、都市近郊農村における農家の存在も確かなものとなり、グリーントリフィケーションの社会的基盤は担保されるようになる。結果として、寺家地区は農村における生態的基盤と経済的基盤、および社会的基盤を相互に関連させて、グリーントリフィケーションの空間として農村再編されたといえる。

寺家地区におけるグリーントリフィケーションは農村の生態的基盤と経済的基盤、および社会的基盤によって支えられているが、生態的規模の保全がグリーントリフィケーションの創成や持続性のメカニズムの鍵になっていた。特に、丘陵地や里山の林地と谷地田の保全が重要であり、寺家ふるさと村体験農業振興組合がそれらの保全の担い手になっている。寺家ふるさと村体験農業振興組合は寺家地区の24戸の農家を中心に組織され、横浜市が地権者から借り受けている林地の維持管理とそれに関連した谷地田の保全活動を行っている。林地の維持管理では、夏季に下草刈りが、秋季から冬季にかけて枝打ちと落葉採取が基本的に行われており、組合の構成農家はそれらの作業に共同で出役した。さらに、林地内の散策道の維持管理も適宜行われた。また、林地によって涵養される谷頭の溜池やそこから流れる小川の維持管理や清掃も組合員の共同出役によって行われた。

寺家ふるさと村体験農業振興組合は1984年に組織され、その構成農家はほとんど変化していない。組合の発足当時、構成員の多くは50代の年齢層にあり、林地や谷地田の維持管理や保全活動に無理なく取り組むことができた。しかし、寺家地区における農家の高齢化は組合の構成農家にも生じており、高齢化による労働力の低下は林地や谷地田の維持管理や保全活動に支障をもたらすようになった。そのような労働力の低下を補完するため、林地の維持管理や保全活動を中心にサポーター制度が2000年代になって導入されるようになった。つまり、寺家地区やその周辺に居住する都市住民が林地の維持管理作業や保全活動にボランティアで参加し、組合の構成農家の出役作業を手助けするようになった。

寺家地区における里山と谷地田を保全する組織の構成農家をサポートするメンバーは70名から

80名であり、その多くは寺家地区の谷地田に隣接した住宅団地に居住している。このような都市住民のサポートは組合の構成農家との個人的な付き合いやつながりを契機にしていたが、2000年以降、都市住民のサポートがロコミで広がり組織化されるようになった。都市住民にとって、里山の林地や谷地田を保全することは居住環境を良好にするために重要であったが、地元農家との交流や地域コミュニティへの帰属、あるいは週末の余暇活動の1つとしても意義をもっていた。また、サポート組織がボランティアであり、保全活動への参加や出役を強制するものでなかったことも、活動が持続する原動力になり、地域コミュニティに強制的に縛られることを嫌う都市住民に適していた。

寺家地区におけるグリーントリフィケーションは、農村空間の生態的基盤と経済的基盤、および社会的基盤を相互関連させながら維持することがはじまりとなった。特に、都市近郊農村においては、それぞれの基盤は都市的要素（アーバニティ）の拡大にともなって脆弱となる傾向を強くしており、1つの基盤の衰退は他の基盤に影響を及ぼし、ついには農村的要素（ルーラリティ）やグリーントリフィケーションの衰退を決定づけてしまう。寺家地区の場合、農村の生態的基盤が里山の林地や谷地田を保全することにより維持されるようになり、1つの基盤の維持・発展は他の基盤にも維持・発展する方向で影響を及ぼし、ついにはグリーントリフィケーションの維持・発展にもつながっている。

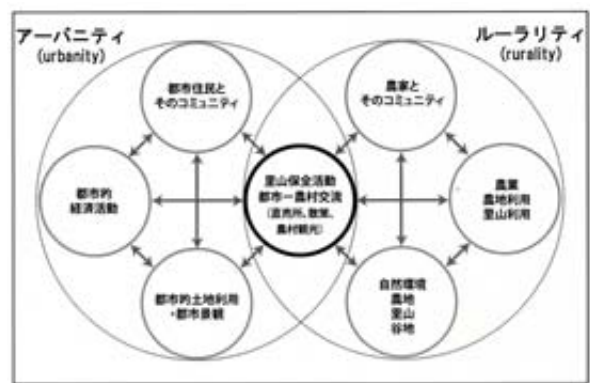


図1 横浜市青葉区寺家地区におけるグリーントリフィケーションの創成とその持続性モデル

寺家地区におけるグリーントリフィケーションの創成とその持続性モデルを示した図1によれば、グリーントリフィケーションの創成と持続性は都市的要素（アーバニティ）と農村的要素（ルーラリティ）の関連で推進されることになる。本来、

それらは相反するものであり、アーバニティの発達とともに、ルーラリティはアーバニティと共存することなく衰退する傾向にあった。しかし、グリーントリフィケーションの創成によりルーラリティの衰退を抑制することができる。このルーラリティと関連したグリーントリフィケーションの受益者は主に都市住民であり、アーバニティとの関連はルーラリティと関連したグリーントリフィケーションに有利に作用することになる。寺家地区におけるグリーントリフィケーションの創成と持続性は都市住民やアーバニティとの関連を利用しながらルーラリティの保全により発展してきた。具体的には、グリーントリフィケーションの創成と持続性に関して、ルーラリティとアーバニティを結びつける結節点は重要な意味を持っており、農村散策やルーラルツーリズム、あるいは農産物直売所は都市住民にとって農村的な要素やグリーントリフィケーションを身近なものとして捉えるための結節点として機能した。

ルーラリティとアーバニティの結節点として機能したものとして、里山の林地や谷地田の保全活動もグリーントリフィケーションの持続性にとって重要であった。それは農村の生態的基盤を保全し、ルーラリティの維持発展に必要なものであったが、都市住民がグリーントリフィケーションの恩恵や持続性に関わる契機にもなった。つまり、農家と都市住民によってグリーントリフィケーションを支えることにより、その保全と持続性が確かなものとなる。また、里山や谷地田の保全活動に都市住民が参加することは、都市住民と農家の交流を促すだけでなく、都市住民間の交流も促すことになり、農村や都市の、あるいは地域のコミュニティのまとまりを向上させている。したがって、寺家地区におけるグリーントリフィケーションの創成と持続性はルーラリティとアーバニティの共生により支えられているともいえる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 20 件)

1. 菊地俊夫：大都市近郊の横浜市青葉区寺家地区におけるルーラリティの商品化. 観光科学研究, 5, 23-33, 査読有, 2012年3月.
2. 有馬貴之・菊地俊夫ほか：長野県安曇野市におけるメディアの効果と地域の再編—NHK連続テレビ小説『おひさま』がもたらすもの—. 観光科学研究, 5, 1-14, 査読有, 2012年3

月.

3. 菊地俊夫：有機野菜のフードシステムとそのフードツーリズムへの可能性—東京大都市近郊における農村再編の挑戦—. 立教大学観光学部紀要, 14, 43-60, 査読有, 2012年3月.
4. 菊地俊夫：食の安全安心と新しいフードシステムとしての農産物直売所. *aromatopia*, 109, 86-89, 査読無, 2012年1月.
5. KIKUCHI, T., IWATA, S., WATANABE, M., MATSUMOTO, J. and HOIDE, H.: An overview: special issue on “Geoparks and Regional Development”. *Journal of Geography*, 120, 725-728, 査読有, 2011年11月.
6. 菊地俊夫・有馬貴之：オーストラリアにおけるジオツーリズムの諸相と地域振興への貢献. *地学雑誌*, 120, 743-760, 査読有, 2011年11月.
7. 菊地俊夫：欧米における有機農産物のマーケットと食の光景. *aromatopia*, 108, 88-91, 査読無, 2011年11月.
8. 菊地俊夫：有機農産物のフードシステムとその特徴. *aromatopia*, 106, 86-89, 査読無, 2011年9月.
9. 菊地俊夫：有機農業による農産物生産とその特徴. *aromatopia*, 104, 84-86, 査読無, 2011年5月.
10. 菊地俊夫・山本 充：ドイツ・バイエルン州におけるルーラルツーリズムの発展と農村空間の商品化. *観光科学研究*, 4, 15-27, 査読有, 2011年3月.
11. 菊地俊夫他：群馬県みなかみ町旧新治村における「たくみの里」の発展と地域観光への貢献. *観光科学研究*, 4, 129-147, 査読有, 2011年3月.
12. 菊地俊夫：「有機認証制度」の理解と活用. *aromatopia*, 105, 47-49, 査読無, 2011年3月.
13. 菊地俊夫：「オーガニック」の歴史的背景と世界の動向. *Aromatopia*, 104, 2-6, 査読無, 2011年1月.
14. Kikuchi, T.: The commodification of rurality and its sustainability in the Jike area, Yokohama City, the Tokyo metropolitan Fringe. *Geographical Review of Japan Series B*, 82(2). 89-102, 査読有, May 20, 2010.
15. 菊地俊夫・有馬貴之：オーストラリアの国立公

- 園における環境資源の保全と利用の地域的性格. 観光科学研究, **3**, 41-56, 査読有, 2010年3月.
16. 菊地俊夫: オーストラリアにおける観光とその地域的性格. 新地理, **57** (2), 44-55, 査読有, 2009年8月.
 17. 菊地俊夫: 身近な環境問題にも役立つ地理—東京郊外の高尾山から学ぶべきもの—. 地理月報, 510, 4-5, 査読無, 2009年4月.
 18. 有馬貴之・和田英子・小原規宏・菊地俊夫: 若者のレクリエーション行動からみた借楽園という観光空間. 観光科学研究, **2**, 49-63, 査読有, 2009年3月.
 19. 末吉 恵・菊地俊夫: 旧宿場町の歴史資源を活かしたまちづくりの構造とその地域性—品川宿と千住宿の比較研究—. 観光科学研究, **2**, 65-84, 査読有, 2009年3月.
 20. Kikuchi, T.: Sustainable development of rurality-based ecotourism in outer urban fringe of Tokyo: a case study of Totoro forest. *Global Environmental Research*, **12**, 145-158, 査読有, November 10, 2008.

[学会発表] (計11件)

1. 菊地俊夫: 大地の遺産としての武蔵野と玉川上水—地理学から提案するジオツーリズムの1つとして—. 日本地理学春季学術大会, 首都大学東京, 2012年3月29日.
2. 菊地俊夫・有馬貴之・黒沼吉弘: 小笠原父島の観光と自然資源の適正利用—南島の事例を中心にして—. 日本ペドロジー学会, 首都大学東京, 2012年3月6日.
3. 菊地俊夫・目代邦康: 九州のジオパークの現状とこれから. 日本地理学会秋季学術大会, 大分大学, 2011年9月24日.
4. 菊地俊夫: オーストラリアを学ぶ新しい方法. 日本地理教育学会, 東京学芸大学, 2011年6月25日.
5. 菊地俊夫: ジオパークと地域振興. 日本地理学会秋季学術大会, 名古屋大学, 2010年10月2日.
6. 菊地俊夫: 大都市近郊の横浜市寺家地区におけるルーラリティの商品化とその持続性. 日本地球惑星科学連合, 幕張メッセ, 2010年5月24日.
7. 宮地忠幸・菊地俊夫・山本 充: 東京都練馬区における農業体験農園の発展に果たす人的ネ

ットワークの地域的役割—農地の市民的利用のドライビングフォースとして—. 日本地理学会春季学術大会, 法政大学, 2010年3月27日.

8. 菊地俊夫: エコ・ツーリズムへの取り組み—世界の視点で足元を見つめる—. 流域自然研究会, 慶応義塾大学, 2009年11月23日.
9. 菊地俊夫・小原規宏: 茨城県北部金砂郷地域におけるそばのブランド化とフードツーリズムの可能性. 日本地理学会秋季学術大会, 琉球大学, 2009年10月24日.
10. 菊地俊夫: 大都市近郊の横浜市寺家地区におけるルーラリティの商品化とその持続性—商品化する日本の農村空間に関する調査報告(2)—. 日本地理学会秋季学術大会, 岩手大学, 2008年10月5日.
11. 菊地俊夫: 東京大都市圏の近郊農村におけるルーラリティの再生とその持続システム. 人文地理学会, 筑波大学, 2008年11月8日.

[図書] (計6件)

1. 山本正三・田林 明・菊地俊夫編著: 『小農複合経営の地域的展開』二宮書店, 399 ページ, 2012年3月.
 2. 菊地俊夫編著: 『世界地誌 日本』朝倉書店, 177 ページ, 2011年6月.
 3. 菊地俊夫・有馬貴之: 乾燥地における自然・文化資源の保全・保護とエコツーリズム. 篠田雅人・門村 浩・山下博樹編『乾燥地の資源とその利用・保全』古今書院, 143-160. 2010年6月.
 4. 菊地俊夫: 植民者にとってのオーストラリアの風土. 片山一道・熊谷圭知編『朝倉世界地理講座第15巻 オセアニア』朝倉書店, 149-164. 2010年4月.
 5. 菊地俊夫: オセアニア. 経済地理学会編『経済地理学の成果と課題 第VII集』古今書院, 219-222. 2010年3月.
 6. 田林 明・菊地俊夫・松井圭介編: 『日本農業の維持システム』農林統計出版, 484p. 2009年2月.
6. 研究組織
 (1) 研究代表者
 菊地 俊夫 (KIKUCHI TOSHIO)
 首都大学東京・都市環境科学研究科・教授
 研究者番号: 50169827